

イ. 自由律、新傾向俳句等について

近代短歌の場合にはほとんどその例を見ることができないのであるが、近代俳句教材の中には、新傾向・自由律俳句、前衛俳句などと呼ばれる、伝統的な俳句形式にとられない作品がかなり見られる。碧梧桐の句は15句が8種類の教科書に採られているが、その中の5句は自由律の句で5種類の教科書に載っている。山頭火の作品は7句が3種類の教科書に採られており、いずれも自由律、井泉水の2句、放哉の1句も同様である。兜太の前衛的な作品は2種の教科に4句が採られている。今のところ、それほど多くの教科書に見られるというわけではないが、

ミモーザを <small>い</small> 活けて一日留守にしたベッドの白く	河東碧梧桐
てふてふひらひらいらかをこえた	種田山頭火
かごからほたる一つ一つを星にする	荻原井泉水
<small>せき</small> 咳をしても一人	尾崎 放哉
<small>わんきよく かしろう</small> 彎曲し火傷し爆心地のマラソン	金子 兜太
<small>みづまくら</small> 水枕ガバリと寒い海がある	西東 三鬼

などのような作品が、虚子・蛇笏・秋桜子などの伝統的な形式によった格調ある作品と並んで教科書に載っていることは、教科書の近代俳句教材を多彩なものにしている。

ウ. 新しい試みについて

近代短歌の場合、3種類の教科書が茂吉の「死にたまふ母」や「悲報来」を連作の形で載せ、2種類の教科書が朝日歌壇の入選歌の中から高校生と同じ年頃の男女の作品を選んで教材として、従来の形式を超えようという試みがなされている。それに比べると、近代俳句においては、従来の教科書とあまり変化が見られないようだ。近年、短詩型文学は、特に俳句の場合、中高年齢層において、結社、新聞俳壇、文化講座などの場において愛好し、創作する人の数がふえているといわれるのに、高校生など若い世代では、小説や詩などのジャンルに比べると、俳句や短歌は親しまれているといにくい状況にある。それだけに、俳句においても、短歌の場合と同様に、若い世代に訴えるような俳句教材の編成が必要であると考えられる。

5. おわりに

以上、「高等学校学習指導要領」の改訂にともなって新しくできた「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」において、近代俳句が教材としてどのように採られているかを調べてきた。こんどの調査は、どちらかというとな数的な調査で、さらに質的な調査——各教科書が「学習の手引」や「課題」等の形で、俳句作品をどのように扱おうとしているかなどの検討が必要であるが、それは次の機会にゆずりたい。

これまでの調査のなかで気づいたいくつかのことを記して、結びとする

ア. 現代俳人の占める比率について

冒頭にも述べたように筆者は先に、今回とほとんど同じ方法を用いて、「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」において現代短歌がどのように扱われているかを調査したが、その結果と今回の調査結果とを比較すると、昭和期に活躍した現代作家の作品は、俳句の場合の方が目立って多い。

長い期間にわたって活躍した、虚子や茂吉などの作家を、明治・大正・昭和の枠でくくることは問題があるのは確かであるが、大体の傾向をつかむために、便宜的に最も活躍した時期がいつであったかによって、明治・大正・昭和の3つの時代に、分けてみよう。「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」の17種類の教科書のうち、3種類以上に作品が載った作家は、俳人が17名、歌人が14名であるが、それらの人々を活躍した時期によって、明治・大正・昭和に分けると右の〔表7〕のようになる。

右の表のように、短歌の場合、昭和期に活躍した作家が、終二・芳美・文明の3名なのに、俳句においては、草田男・誓子・秋桜子・楸邨・波郷・汀女・茅舎・三鬼・竜太・多佳子と10名を数える。その結果、近代短歌教材が全体として古典的というか、どちらかという古めかしい感じを与えるものになっているのに、近代俳句教材は、全体として現代的な感じを与えるものになっている。

〔表7〕 時代別に見た俳句・短歌主要作家

	俳 人	歌 人
明 治	正岡 子規	石川 啄木 与謝野晶子 正岡 子規 長塚 節 伊藤左千夫
大 正	高浜 虚子 飯田 蛇笏 村上 鬼城 河東碧梧桐 杉田 久女 種田山頭火	斎藤 茂吉 北原 白秋 若山 牧水 釈 迢空 島木 赤彦 会津 八一
昭 和	中村草田男 山口 誓子 水原秋桜子 加藤 楸邨 石田 波郷 中村 汀女 川端 茅舎 西東 三鬼 飯田 竜太 橋本多佳子	宮 終二 近藤 芳美 土屋 文明

5 夏の河赤き鉄鎖のはし浸る
 5 鱚いわしぐも雲人に告ぐべきことならず
 5 吹きおこる秋風つる鶴をあゆましむ
 5 バスを待ち大路の春をうたがはず
 4 降る雪や明治は遠くなりけり
 4 冬の水一枝の影も欺かず
 4 葛飾かつしかや桃まがきの籬も水田べり
 4 隠岐おきやいま木の芽をかこむ怒濤どたうかな
 4 木の葉ふりやまずいそぐなよいそぐなよ
 4 曳ひかれる牛が辻つじですつと見回した秋空だ
 4 水枕みづまくらガバリと寒い海がある
 3 金亀子こがねむし擲なげうつ闇やみの深さかな
 3 春風や闘志いだきて丘に立つ
 3 野を焼いて帰れば燈下母やさし
 3 去年今年貫く棒のごときもの
 3 大空に羽子の白妙とどまれり
 3 秋の航いちだいこんえんばん一大紺円盤の中
 3 かりかりと蟻たらう螂はち蜂の貝かほを食む
 3 夏草に汽缶車の車輪来て止まる
 3 つきぬけて天上の紺曼珠沙華まんじゆしやげ
 3 ピストルがプールの硬き面にひびき
 3 七月の青嶺あをねまちかく熔鋳ようこうろ炉
 3 高嶺たかね星蚕飼ほしこがひの村は寝しづまり
 3 来しかたや馬酔木あしび咲く野の日のひかり
 3 白樺しらかばに月照りつつも馬棚ませの霧
 3 春惜しむおんすがたこそとこしなへ
 3 滝落ちて群青世界とどろけり
 3 鮫鱈あんどうの骨まで凍ててぶちきる
 3 生きかはり死にかはりして打つ田かな
 3 冬蜂ふゆばちの死にどころなく歩きけり
 3 赤い椿つばき白い椿と落ちにけり
 3 ひらひらと月光降りぬ貝割菜かひわりな
 3 ぜんまいののの字ばかりの寂光土
 3 碓くだまして山ほととぎすほしいまま
 3 分け入つても分け入つても青い山

山口 誓子
 加藤 楸邨
 石田 波郷
 石田 波郷
 中村 草田男
 中村 草田男
 水原 秋桜子
 加藤 楸邨
 加藤 楸邨
 河東 碧梧桐
 西東 三鬼
 高浜 虚子
 高浜 虚子
 高浜 虚子
 高浜 虚子
 高浜 虚子
 山口 誓子
 山口 誓子
 山口 誓子
 山口 誓子
 山口 誓子
 山口 誓子
 水原 秋桜子
 水原 秋桜子
 水原 秋桜子
 水原 秋桜子
 水原 秋桜子
 水原 秋桜子
 加藤 楸邨
 村上 鬼城
 村上 鬼城
 河東 碧梧桐
 川端 茅舎
 川端 茅舎
 杉田 久女
 種田 山頭火

夏目漱石（2句・2回）

番号	俳句	掲載教科書	掲載回数
1	秋風の一人を吹くや海の上	旺文1	1
2	無人島の天子とならば涼しかろ	旺文1	1

尾崎放哉（1句・1回）

番号	俳句	掲載教科書	掲載回数
1	咳 <small>せき</small> をしても一人	三省2	1

以上、作者別にそれぞれの俳句がどの教科書に採られているかを見てきたが、それによってその句が何回教科書に載っているかも判明した。そこで、掲載された回数の多い順に俳句を示すと、次の〔表6〕のようになる。紙面の都合により、掲載された回数が3回以上のものだけをここに示すことにする。作品の配列は、掲載された回数の多い順とし、回数が同じのときは、その作品を採った教科書の〔表1〕の配列順に従うこととする。

〔表6〕 作品別掲載回数

掲載回数	俳句	作者
11	万緑の中 <small>あこ</small> や吾子の齒生えそむる	中村草田男
9	白牡丹といふといへども <small>こう</small> 紅ほのか	高浜虚子
8	糸瓜 <small>へちま</small> 咲いて痰のつまりし仏かな	正岡子規
8	芋の露連山影を正しうす	飯田蛇笏
7	遠山に日の当りたる枯れ野かな	高浜虚子
7	流水 <small>そうや</small> や宗谷の門波 <small>となみ</small> 荒れやまず	山口誓子
7	冬菊のまとふはおのがひかりのみ	水原秋桜子
7	いくたびも雪の深さをたづねけり	正岡子規
7	くろがねの秋の風鈴鳴りにけり	飯田蛇笏
6	手毬 <small>てまりうた</small> 唄かなしきことをうつくしく	高浜虚子
6	啄木鳥 <small>きつつき</small> や落ち葉をいそぐ牧の木々	水原秋桜子
6	雉 <small>まじ</small> の眼 <small>め</small> のかうかうとして売られけり	加藤楸邨
5	玫瑰 <small>はまなす</small> や今も沖には未来あり	中村草田男
5	海に出て <small>こがらし</small> 木枯帰るところなし	山口誓子

森 澄雄（5句・6回）

番号	俳句	掲載教科書	掲載回数
1	雪嶺 <small>せつれい</small> のひとたび暮 <small>あ</small> れて頭 <small>あ</small> はるる	明精2 角総2	2
2	石仏 <small>いしぼつ</small> に生きて頬 <small>ほ</small> もつ春乙女	明精2	1
3	家に時計なければ雪はとめどなし	明精2	1
4	蟻 <small>たうらう</small> 螂 <small>たちき</small> の立木 <small>たてき</small> と思 <small>われ</small> ふ吾 <small>われ</small> に寄る	角総2	1
5	餅 <small>もち</small> 焼くやちちははの闇 <small>やみ</small> そこにあり	角総2	1

金子兜太（4句・6回）

番号	俳句	掲載教科書	掲載回数
1	霧 <small>きり</small> の村石 <small>むらいし</small> を投 <small>な</small> うらば父母散らん	角総1 角精2	2
2	彎曲 <small>わんきよく</small> し火傷 <small>かしよう</small> し爆心地 <small>ばくしんち</small> のマラソン	角総1 角精2	2
3	果樹園 <small>くだづみ</small> がシャツ一枚 <small>おれ</small> の俺 <small>おれ</small> の孤島	角総1	1
4	銀行員 <small>ぎんぎん</small> ら朝 <small>あ</small> より蛍光 <small>けいこう</small> す烏賊 <small>いか</small> のごとく	角精2	1

荻原井泉水（2句・2回）

番号	俳句	掲載教科書	掲載回数
1	かごからほたる一つ一つを星にする	学図2	1
2	月高くして漁火それぞれの座につけり	学図2	1

富沢赤黄男（2句・2回）

番号	俳句	掲載教科書	掲載回数
1	秋の壁白ければ目で鳥を描く	一新2	1
2	切株 <small>きりかぶ</small> はじいんじいんとひびくなり	一新2	1

飯田竜太（8句・9回）

番号	俳句	掲載教科書	掲載回数
1	父母の亡き裏口 <small>あ</small> 開いて枯木山 <small>かれきやま</small>	角総2 尚学2	2
2	かたつむり甲斐 <small>かひ</small> も信濃 <small>しなの</small> も雨のなか	明基2	1
3	黒揚羽 <small>くろあげは</small> 九月の樹間透きとほり	明基2	1
4	子燕 <small>こつばめ</small> が育つ雲雀 <small>ひばり</small> の声のなか	明基2	1
5	馬の瞳 <small>め</small> も零下 <small>あを</small> に碧む峠口	角総2	1
6	紺緋 <small>こんがすりしゆんげつ</small> 春月重く出でしかも	角総2	1
7	溪川 <small>たにかは</small> の身を揺りて夏 <small>きた</small> 来るなり	尚学2	1
8	春 <small>とび</small> の鳶寄りわかれては高みつつ	尚学2	1

種田山頭火（7句・9回）

番号	俳句	掲載教科書	掲載回数
1	分け入つても分け入つても青い山	大修2 筑摩1 一新2	3
2	うしろ姿のしぐれてゆくか	大修2	1
3	窓あけていつぱいの春	大修2	1
4	砂丘にうづくまりけふも佐渡は見えない	筑摩1	1
5	てふてふひらひらいらかをこえた	筑摩1	1
6	ひとりひっそり竹の子竹になる	筑摩1	1
7	ほととぎすあすはあの山こえて行かう	一新2	1

橋本多佳子（5句・7回）

番号	俳句	掲載教科書	掲載回数
1	乳母車夏 <small>とたう</small> の怒濤によこむきに	角精1 尚学2	2
2	蛍籠 <small>かごくら</small> 昏ければ揺り炎 <small>も</small> えたたす	三省2 尚学2	2
3	いなびかり北よりすれば北を見る	角精1	1
4	七夕や髪ぬれしまま人に逢 <small>あ</small> ふ	角精1	1
5	星空へ店より林檎 <small>りんご</small> あふれをり	尚学2	1

川端茅舎（7句・12回）

番号	俳句	掲載教科書	掲載回数
1	ぜんまいのの字ばかりの寂光土	東書2 右文2 尚学2	3
2	ひらひらと月光降りぬ貝割菜 ^{かひわりな}	東書2 右文2 角総2	3
3	金剛の露ひとつぶや石の上	角総2 尚学2	2
4	とび下りて弾みやまずよ寒雀 ^{かんすずめ}	東書2	1
5	月光に深雪の削のかくれなし ^{みゆき まず}	右文2	1
6	しんしんと雪降る空に鳶の笛 ^{とび}	角総2	1
7	約束の寒の土筆を煮て下さい ^{つくし}	尚学2	1

西東三鬼（6句・10回）

番号	俳句	掲載教科書	掲載回数
1	水枕 ^{みづまくら} ガバリと寒い海がある	東書2 三省2 角総2 尚新2	4
2	暗く暑く大群集と花火待つ	角総2 尚新2	2
3	算術の少年しのび泣けり夏	東書2	1
4	倒れたる案山子の顔の上に天 ^{かかし}	東書2	1
5	秋の暮大魚の骨を海が引く	角総2	1
6	枯蓮のうごく時きてみなうごく	尚新2	1

杉田久女（6句・10回）

番号	俳句	掲載教科書	掲載回数
1	笈 ^{こだま} して山ほととぎすほしいまま	明精1 右文1 尚新2	3
2	紫陽花に秋冷いたる信濃かな ^{あぢさゐり しなの}	明精1 尚新2	2
3	花衣ぬぐやまつはる紐いろいろ ^{ひも}	明精1 右文1	2
4	丹の欄にさへづる鳥も惜春譜 ^に	右文1	1
5	むれ落ちて楊貴妃桜尚あせず ^{やうきひ なほ}	右文1	1
6	虫なくや帯に手さして寄り柱 ^よ	尚新2	1

河東碧梧桐 (15句・20回)

番号	俳句	掲載教科書	掲載回数
1	曳 <small>ひ</small> かれる牛が辻 <small>つじ</small> でずつと見回した秋空だ	学図2 三省2 角精1 旺文1	4
2	赤い椿 <small>つばき</small> 白い椿と落ちにけり	明基2 角総2 角精1	3
3	笛方のかくれ <small>がほ</small> 貌 <small>たきぎ</small> なり新能	学図2	1
4	出羽人も知らぬ山見ゆ今朝の冬	明基2	1
5	鳥渡る博物館の林かな	明基2	1
6	空をはさむ蟹 <small>かに</small> 死にをるや雲の峰	明精2	1
7	この道の富士 <small>ふじ</small> になりゆく芒 <small>すすき</small> かな	明精2	1
8	抱 <small>おこ</small> き起 <small>はき</small> す萩と吹かるる野 <small>の</small> 分 <small>わか</small> かな	明精2	1
9	鮎 <small>あゆ</small> 落ちぬ草庵 <small>さうあん</small> の硯 <small>すずりくぼ</small> 凹みけり	右文2	1
10	今朝の秋千里の馬を相しけり	右文2	1
11	春寒し水田の上の根なし雲	右文2	1
12	大根を煮た夕飯の子供たちの中にをる	角総2	1
13	ミモーザ <small>い</small> を活けて一日留守にしたベッドの白く	角総2	1
14	一軒屋も過ぎ落葉する風のままに行く	角精1	1
15	思はずもヒヨヨ生まれぬ冬 <small>さうび</small> 薔薇	旺文1	1

中村汀女 (10句・12回)

番号	俳句	掲載教科書	掲載回数
1	あはれ子の夜寒 <small>よさむ</small> の床の引けば寄る	明基1 角総2	2
2	外にも出よ触るるばかりに春の月	右文2 角総2	2
3	秋雨 <small>あきさめ</small> の瓦斯 <small>ガス</small> が飛びつく <small>マツチ</small> 燐寸かな	明基1	1
4	枯蓮 <small>かれはす</small> の折るるは折れて春の水	明基1	1
5	ガソリンの街に描く灯 <small>か</small> や夜半の夏	右文2	1
6	春宵や駅の時計の五分 <small>た</small> 経ち	右文2	1
7	稲妻のゆたかなる夜も寝べきころ	角総2	1
8	咳 <small>せき</small> の子のなぞなぞあそびきりもなや	尚新1	1
9	地階 <small>ひ</small> の灯春の雪降る樹 <small>き</small> のもとに	尚新1	1
10	とどまればあたりにふゆる <small>とんぼ</small> 蜻蛉かな	尚新1	1

飯田蛇笈 (11句・26回)

番号	俳句	掲載教科書	掲載回数
1	芋の露連山影を正しうす	東書2 学図2 三省2 右文2 角総1 角精1 尚新1 一新2	8
2	くろがねの秋の風鈴鳴りにけり	東書2 学図2 大修2 明精2 右文2 角精1 尚新1	7
3	雪山を匍ひまはりみる <small>こだま</small> 餅かな	東書2 大修2	2
4	をりとりてはらりとおもきすすきかな	明精2 尚新2	2
5	つぶらかな眼 <small>め</small> に人をみる <small>とかげ</small> 蜥蜴かな	大修2	1
6	山国の虚空日わたる冬至かな	明精2	1
7	極寒のちりもとどめず巖ふすま	右文2	1
8	秋たつや川瀬にまじる風の音	角総1	1
9	炎天を槍のごとくに涼気すぐ	角総1	1
10	死火山の膚つめたくて草いちご	角精1	1
11	たましひのたとへば秋のほたるかな	一新2	1

村上鬼城 (14句・21回)

番号	俳句	掲載教科書	掲載回数
1	<small>ふゆばち</small> 冬蜂の死にどころなく歩きけり	明基2 角総2 第一2	3
2	生きかはり死にかはりして打つ田かな	右文2 角総2 尚新2	3
3	残雪やごうごうと吹く松の風	大修2 角総2	2
4	<small>やせうま</small> 瘦馬のあはれ機嫌や秋高し	大修2 右文2	2
5	夏草 <small>は あが</small> に這ひ上りたる <small>すてこ</small> 捨蚕かな	明基2 尚新2	2
6	みづすまし水 <small>をど</small> に跳つて水鉄 <small>ごと</small> の如し	大修2	1
7	<small>ひよう</small> 雹晴れて <small>くわつせん</small> 豁然とある山河かな	明基2	1
8	八重桜地上 <small>だい がらん</small> にゑがく大伽藍	右文2	1
9	親よりも白き羊や今朝の秋	尚学2	1
10	街道をきちきちととぶ <small>ばつた</small> 蟋蟀かな	尚学2	1
11	小春日や石 <small>か</small> を噛み居る <small>あかとんぼ</small> 赤蜻蛉	尚学2	1
12	花散るや耳ふつて馬のおとなしき	尚新2	1
13	鷹のつらきびしく老いて哀れなり	第一2	1
14	闘 <small>まなこ</small> 鶏の眼つむれて飼はれけり	第一2	1

5	柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺	右文2 尚学1	2
6	鶏頭の十四五本もありぬべし	旺文1 尚新1	2
7	夏嵐机上の白紙飛び尽くす	学図2	1
8	夕風や白ばらの花皆動く	三省2	1
9	行く我にとどまる汝 <small>なれ</small> に秋二つ	光村2	1
10	三十六坊一坊残る秋の風	大修2	1
11	汐干 <small>しほひ</small> より今帰りたる隣かな	右文2	1
12	初芝居 <small>はつしばゐ</small> 見て来て晴れ着 <small>いま</small> 未だ脱がず	右文2	1
13	秋の雲湖水の庭を渡りけり	筑摩1	1
14	凧や雲吹き落す海のはて	筑摩1	1
15	三千の俳句 <small>けり</small> を <small>かき</small> 閲し柿二つ	第一2	1
16	痰 <small>たん</small> 一斗 <small>へちま</small> 糸瓜の水も間に合はず	第一2	1

石田波郷 (18句・29回)

番号	俳句	掲載教科書	掲載回数
1	吹きおこる秋風 <small>つる</small> 鶴をあゆましむ	東書2 光村2 明基2 明精2 旺文1	5
2	バスを待ち大路 <small>おほぢ</small> の春をうたがはず	明精2 右文2 角総1 角精1 旺文1	5
3	プラタナス夜もみどりなる夏は来ぬ	東書2 明基2	2
4	泉への道後れゆく安けさよ	光村2 角総1	2
5	槇 <small>まき</small> の空秋 <small>おし</small> 押し移りゐたりけり	明精2 右文2	2
6	日の出前五月のポスト町に町に	東書2	1
7	秋の夜のオリオン低し胸の上	大修2	1
8	栗食 <small>くりは</small> むや若く <small>かな</small> 哀しき背を曲げて	大修2	1
9	朱樂割くや歡喜の如き色と香と	大修2	1
10	雪降り時間 <small>とき</small> の東の降るごとく	明基2	1
11	一点 <small>はへなき</small> の蠅 <small>がら</small> 亡骸 <small>すそ</small> の裾 <small>すそ</small> に待す	右文2	1
12	雷落ちて火柱見せよ胸の上	筑摩1	1
13	雁 <small>かりがね</small> や残るものみな美しき	筑摩1	1
14	金の芒 <small>すすき</small> はるかなる母 <small>いの</small> の禱 <small>いのち</small> りをり	筑摩1	1
15	隙間 <small>すきま</small> 風 <small>かぜ</small> 兄妹 <small>たが</small> に母の文異ふ	筑摩1	1
16	はこべらや焦土のいろの雀ども	角総1	1
17	霜の墓抱き起こされしとき見たり	角精1	1
18	束 <small>つか</small> の間や寒雲燃えて金焦土	角精1	1

15、	^{ひき} 慕 ^{たうせうたいじ} ないて唐招提寺春いづこ	明精 1	1
16	むさしのの空真青なる落葉かな	右文 1	1
17	しぐれふるみちのくに大き仏あり	尚新 2	1

加藤楸邨 (16句・36回)

番号	俳句	掲載教科書	掲載回数
1	^{まじ} 雉子の眼のかうかうとして売られけり	東書 2 教出 1 大修 2 明基 1 右文 1 角精 2	6
2	^{いわしぐも} 鯛雲人に告ぐべきことならず	東書 2 大修 2 旺文 1 尚新 1 第一 2	5
3	^{おき} 隠岐やいま木の芽をかこむ怒濤かな	東書 2 明精 1 一新 1 第一 2	4
4	^こ 木の葉ふりやまずいそぐなよいそぐなよ	明基 1 明精 1 旺文 1 第一 2	4
5	^{あんこう} 鮫鱈の骨まで凍ててぶちきらる	学図 2 教出 1 右文 1	3
6	しづかなる力満ちゆき ^{ぼつた} 蟬蛻とぶ	右文 1 尚新 1	2
7	^{ひきがへるたれ} 慕 誰かものいへ声かぎり	角総 1 角精 2	2
8	^{わた} 棉の実を摘みみてうたふこともなし	角総 1 角精 2	2
9	寄りあひて馬はしぐれにめひらける	学図 2	1
10	火の奥に牡丹崩るるさまを見つ	大修 2	1
11	落葉松はいつめざめても雪降りをり	明基 1	1
12	冬の ^{さぎ} 鷺あな羽 ^う 搏たんとして止みぬ	明精 1	1
13	灯を消すや心崖 ^{がけ} なす月の前	右文 1	1
14	^{ふゆかもめ} 冬 鷗生に家なし死に墓なし	角総 1	1
15	寒雷やびりりびりりと ^{まよ} 真夜の ^{はり} 玻璃	尚新 1	1
16	長き長き春暁の貨車なつかしき	一新 2	1

正岡子規 (16句・33回)

番号	俳句	掲載教科書	掲載回数
1	^{へちま} 糸瓜咲いて痰のつまりし仏かな	東書 2 教出 1 光村 2 右文 2 筑摩 1 旺文 1 尚学 1 尚新 1	8
2	いくたびも雪の深さをたづねけり	東書 2 学図 2 右文 2 筑摩 2 尚学 1 尚新 1 第一 2	7
3	^{とんぼつくば} 赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり	東書 2 大修 2	2
4	雪残る頂一つ国境	教出 1 大修 2	2

9	炎天の遠き帆やわがこころの帆	尚学2 第一2	2
10	祭あはれ奇術をとめを恋ひ焦れ	三省2	1
11	おほわたへ座うつりしたり枯野屋 <small>かれのほし</small>	大修2	1
12	向日葵 <small>ひまわり</small> に天 <small>てん</small> よりも地の夕焼くる	大修2	1
13	匙 <small>さじ</small> なめて童たのしも夏水 <small>わらべ</small>	明基2	1
14	するすると岩をするすると地を <small>とかげ</small> 蜥蜴	明基2	1
15	蛭獲て少年の指みどりなり	明精2	1
16	起重機の手挙げて立てり海は春	右文1	1
17	鶴 <small>つぐみ</small> 死して翅 <small>はねひろ</small> 拡ぐるに任せたり	右文1	1
18	月光は凍りて宙に停れる <small>とどま</small>	筑摩1	1
19	手花火に妹がかひなの照らさるる	筑摩1	1
20	空蝉 <small>うつせみ</small> を妹が手にせり欲しと思ふ <small>いも</small>	一新2	1
21	はたはたはわぎもが肩を越えゆけり	一新2	1

水原秋桜子 (17句・45回)

番号	俳句	掲載教科書	掲載回数
1	冬菊のまとふはおのがひかりのみ	東書2 明精2 角総1 角精2 尚学1 一新2 第一2	7
2	啄木鳥 <small>きつつき</small> や落ち葉をいそぐ牧の木々	教出1 明基1 明精2 右文1 角精2 尚学1	6
3	葛飾 <small>かつしか</small> や桃 <small>まがき</small> の籬も水田べり	光村2 角総2 角精2 尚学1	4
4	高嶺星蚕飼 <small>たかねほしこがひ</small> の村は寝しづまり	学図2 明基1 第一2	3
5	来しかたや馬酔木 <small>あしび</small> 咲く野の日のひかり	三省2 教出1 光村2	3
6	白樺 <small>しらかば</small> に月照りつつも馬棚 <small>ませ</small> の霧	大修2 右文1 尚新2	3
7	春惜しむおんすがたこそとこしなへ	大修2 旺文1 尚新1	3
8	滝落ちて群青世界とどろけり	旺文1 角総1 第一2	3
9	梨 <small>なし</small> 咲くと葛飾の野はとのぐもり	東書2 大修2	2
10	わがいのち菊にむかひてしづかなる	学図2 尚新2	2
11	寒鯉 <small>かんこひ</small> を真白しと見れば鱮 <small>ひれ</small> の藍 <small>ある</small>	右文1 一新2	2
12	麦秋の中なるが悲し聖廃城 <small>はいきよ</small>	尚学1 尚新1	2
13	コスモスを離れて蝶 <small>てふ</small> に谿 <small>たに</small> 深し	東書2	1
14	綿虫やむらさき澄める仔牛 <small>こうし</small> の眼	明基1	1

4	冬の水一枝の影も欺かず	教出1 大修2 角総1 第一2	4
5	秋の航一大紺円盤の中	学図2 三省2 光村2	3
6	町空のつばくらめのみ新しや	東書2	1
7	校塔に鳩多き日や卒業す	学図2	1
8	少年の見遣るは少女鳥雲に	大修2	1
9	勇気こそ地の塩なれや梅真白	大修2	1
10	蟻螂は馬車に逃げられし馭車のさま	明基1	1
11	ひた急ぐ犬に会ひけり木の芽道	明基1	1
12	咲き切つて薔薇の容を超えけるも	明精1	1
13	炭を焼く長き煙の元にあり	右文1	1
14	父となりしか蜥蜴とともに立ち止まる	右文1	1
15	妻二夜あらず二夜の天の川	右文1	1
16	空は太初の青さ妻より林檎うく	筑摩1	1
17	乙鳥はまぶしき鳥となりにけり	筑摩1	1
18	春の闇幼きおそれそと復る	筑摩1	1
19	種蒔ける者の足あとと治しや	角総1	1
20	焼跡に遺る三和土や手毬つく	角精1	1
21	葡萄食ふ一語一語の如くにて	尚学1	1
22	たんぽぽのかたさや海の日も一輪	尚新1	1
23	冬すでに路標にまがふ墓一基	尚新1	1
24	夜の蟻迷へるものは孤を描く	一新2	1

山口誓子 (21句・46回)

番号	俳句	掲載教科書	掲載回数
1	流水や宗谷の門波荒れやまず	学図2 光村2 明精2 筑摩1 角総1 角精2 尚学2	7
2	海に出て木枯帰るところなし	東書2 右文1 角精2 尚学1 第一2	5
3	夏の河赤き鉄鎖のはし浸る	教出1 明基2 明精2 旺文1 尚学2	5
4	かりかりと蟻螂蜂の只を食む	東書2 教出1 光村2	3
5	夏草に汽缶車の車輪来て止まる	東書2 大修2 右文1	3
6	つきぬけて天上の紺曼珠沙華	学図2 尚学1 第一2	3
7	ピストルがプールの硬き面にひびき	筑摩1 角総1 尚学1	3
8	七月の青嶺まぢかく熔鋳炉	角総1 角精2 旺文1	3

〔表5〕 作者別掲載俳句一覧表

高浜虚子（19句・49回）

番号	俳句	掲載教科書	掲載回数
1	白牡丹といふといへども紅 <small>こう</small> ほのか	東書2 学図2 光村1 大修2 筑摩1 角精2 角総1 尚学1 尚新1	9
2	遠山に日 <small>あた</small> の当りたる枯れ野かな	教出1 明基1 明精1 角総1 角精2 旺文1 尚新1	7
3	手 <small>てまりうた</small> 毬唄かなしきことをうつくしく	光村2 明精1 筑摩1 尚学1 尚新1 第一2	6
4	金亀 <small>こがねむし</small> 子 <small>なげう</small> 擲 <small>やみ</small> つ闇の深さかな	学図2 明精1 右文1	3
5	春風や闘志いだきて丘に立つ	教出1 筑摩1 旺文1	3
6	野を焼いて帰れば燈下母やさし	明基1 筑摩1 尚新1	3
7	去年 <small>こぞ</small> 今年貫く棒のごときもの	角総1 一新2 第一2	3
8	大空に羽子 <small>はね</small> の白妙 <small>しろたへ</small> とどまれり	角精2 尚新2 一新2	3
9	桐一葉日あたりながら落ちにけり	東書2 尚学1	2
10	流れ行く大根の葉の早さかな	東書2	1
11	芽ぐむなる大樹の幹に耳を寄せ	三省2	1
12	彼一語我一語秋深みかも	大修2	1
13	爛々 <small>らん</small> と昼の星見 <small>きのこ</small> え菌生え	大修2	1
14	土塊 <small>つちくれ</small> を一つ動かし物芽 <small>い</small> 出づ	明基1	1
15	この庭の遅日 <small>ちじつ</small> の石のいつまでも	尚新2	1
16	襟巻 <small>えりまき</small> の狐 <small>きつね</small> の顔は別に在り	右文1	1
17	たとふれば独楽 <small>こま</small> のはじける如くなり	右文1	1
18	炎天の空美しや高野山	右文1	1
19	山国の蝶 <small>てふ</small> を荒しと思はずや	第一2	1

中村草田男（24句・46回）

番号	俳句	掲載教科書	掲載回数
1	万緑の中や吾子 <small>あこ</small> の歯生えそむる	東書2 教出2 光村2 明精1 角総1 角精1 旺文1 尚学1 尚新1 一新2 第一2	11
2	玫瑰 <small>はまなす</small> や今も沖には未来あり	明基1 明精1 筑摩1 尚学1 第一2	5
3	降る雪や明治は遠くなりけり	東書2 右文1 角精1 旺文1	4

〔表4〕 各教科書の作者別に見た掲載句数

記号	発行所	併		高浜 虚子	中村草田男	山口 誓子	水原秋桜子	加藤 楸 邨	正岡 子規	石田 波郷	飯田 蛇笏	村上 鬼城	河東 碧梧 桐	中村 汀 女	川端 茅 舎	西東 三 鬼	杉田 久 女	飯田 竜 太	種田 山頭 火	橋本 多佳子	森 澄 雄	金子 兜 太	萩原 井 泉水	富沢 赤 黄 男	夏目 漱 石	尾崎 放 哉	合 計	
		書 名	人 名																									
A	東京書籍	国語 I・II		3	3	3	3	3	3	3	3				3	3												30
B	学校図書	高等学校国語 I・II		2	2	2	2	2	2		2		2								2							18
C	三省堂	新国語 I・II		1	1	1	1		1		1		1			1				1								10
D	教育出版	国語 I・II		2	2	2	2	2	2																			12
E	光村図書	国語 I・II		2	2	2	2		2	2																		12
F	大修館	高等学校国語 I・II		3	3	3	3	3	3	3	3	3	3							3								30
G	明治書院	基本国語 I・II		3	3	3	3	3		3		3	3	3					3									30
H	明治書院	精選国語 I・II		3	3	3	3	3	3	3	3		3									3						30
I	右文書院	高等学校国語 I・II		4	4	4	4	4	5	3	3	3	3	3			3	4										47
J	筑摩書房	高等学校用国語 I・II		4	4	4			4	4									4									24
K	角川書店	高等学校総合国語 I・II		3	3	3	3	3		3	3	3	3	3	3	3			3			3	3					45
L	角川書店	高等学校精選国語 I・II		3	3	3	3	3		3	3		3							3		3						30
M	旺文社	高等学校国語 I・II		2	2	2	2	2	2	2			2											2				18
N	尚学図書	高等学校国語 I・II		3	3	<3	3		3			3			3													30
O	尚学図書	高等学校新選国語 I・II		<3	3		<3	3	3	3	3	3	3	3	3	3												36
P	第一学習社	高等学校新国語 I・II		2	2	2	2	2			2									2				2				16
Q	第一学習社	高等学校国語 I・II		3	3	3	3	3	3			3																21
合 計				49	46	46	45	36	33	29	26	21	20	12	12	10	10	9	9	7	6	6	2	2	2	1	439	

について示したのが次のページの〔表4〕である。

この表の、上の欄の俳人の名の配列の順序は、各教科書を通算してその作者の句の掲載された回数の多い者を左、少ない者を右にして順に並べてある。

この表では、作品が「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」のどちらに載せられているかは原則として区別せずに表に示しているが、教科書の中には同じ俳人の作品を「国語Ⅰ」と「国語Ⅱ」の両方に載せているものがある。尚学図書の「高等学校国語」と「高等学校新選国語」がそれで、前者では山口誓子の句をⅠとⅡに3句ずつ、後者では高浜虚子と水原秋桜子の句をやはりⅠとⅡに3句ずつ載せている。そのことを $\frac{3}{3}$ >のように示した。

この〔表4〕からは、「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」に作品が載った俳人の数が26名で、最も多くの句が採られたのが虚子（のべ49句）、草田男・誓子（各46句）、秋桜子（45句）、楸邨（36句）、子規（33句）とつづくことがわかる。虚子と草田男の場合は17種類のすべての教科書に、そして誓子と秋桜子の場合は1つの教科書をのぞいた16種類の教科書に作品が採られていることがわかる。

近代短歌の場合も、教科書に作品が載った専門歌人の数は26名で、近代俳句の場合と同じである。これは、「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」で短歌と俳句にはほぼ同一のページ数がさかれ、教科書に採られる作家や作品の数もほぼ等しいことによると考えられる。ただし、近代短歌の場合は斎藤茂吉の作品がのべ91首、つづく啄木、晶子が44首、43首というように茂吉の作品が他を圧して多く採られていたが、近代俳句においては、特に1人の作家に集中するという現象は見られない。

4. どんな句が採られているか

次に、各俳人の、どの句が教科書に採られているかを次の〔表5〕に示す。この表における俳人の配列は、教科書に採られた俳句の数の多い順とし、その数が同じときは、教科書に掲載された回数の合計の多い順とする。それぞれの俳人の名のあとに、括弧でくくって、その俳人の掲載された俳句の総数と、延べ掲載回数を示す。教科書により送り仮名、ふり仮名など表記に違いがあることがあるが、この表では、掲載教科書の欄の最初（いちばん左）に示した教科書の表記に従うこととする。

を置く。「近代の俳句」は、子規・虚子・秋桜子・草田男・誓子の5名の俳句を3句ずつ、計15句を載せる。「俳句の鑑賞」は秋元不死男の筆になるもので、3句を鑑賞している。「国語Ⅱ」では、「十四 短歌と俳句」の単元に「近代の俳句」と「折々のうた」の章で俳句を扱っている。「近代の俳句」は、鬼城・茅舎・誓子・多佳子・竜太の5名の俳句を3句ずつ、計15句を載せる。「折々のうた」は大岡信の鑑賞文で、短歌とともに、5句を鑑賞している。この教科書は自由律俳句を載せていない。

○ 尚学図書 「高等学校新選国語Ⅰ・Ⅱ」

近代俳句は「国語Ⅰ」に21句、「国語Ⅱ」に15句、計36句を載せ、またⅠとⅡのそれぞれに鑑賞文も載せている。

「国語Ⅰ」では、「九 短歌と俳句」の単元に「近代の俳句」と「俳句の鑑賞」の章を置く。「近代の俳句」は、子規・虚子・蛇笏・秋桜子・汀女・草田男・楸邨の7名の俳句を3句ずつ、計21句を載せる。「俳句の鑑賞」は中村草田男の筆になるもので、3つの句を鑑賞している。「国語Ⅱ」では、「十一 短歌と俳句」の単元に「近代の俳句」と「折々のうた」の章を置く。「近代の俳句」は、鬼城・虚子・久女・秋桜子・三鬼の5名の俳句を3句ずつ、計15句を載せる。「折々のうた」は大岡信の鑑賞文で、短歌とともに、5句を鑑賞している。この教科書は自由律俳句を載せていない。

○ 第一学習社 「高等学校国語Ⅰ・Ⅱ」

近代俳句は「国語Ⅰ」には載せず、「国語Ⅱ」で扱う。「十一 俳句の世界」の単元に「去年今年」と「俳句は野面積みの石垣に似ている」の2つの章を置く。「去年今年」では、虚子・楸邨・草田男・蛇笏・秋桜子・山頭火・赤黄男・誓子の8名の俳句を2句ずつ、計16句を載せる。このうちの山頭火の2句は自由律俳句。「俳句は野面積みの……」の文は飯田竜太の筆になる鑑賞文で、同じものが、Bの学校図書の「国語Ⅱ」にも採られていた。

○ 第一学習社 「高等学校国語Ⅰ・Ⅱ」

近代俳句は「国語Ⅰ」には載せず、「国語Ⅱ」で扱う。「俳句」の単元に「このころの帆」という章の題で、子規・虚子・鬼城・秋桜子・草田男・楸邨・誓子の7名の俳句を3句ずつ、計21句を載せている。自由律俳句は見られない。

以上、17種類の教科書について、それぞれ近代短歌の単元の構成について概観し、どの俳人の俳句が何句その教科書に採られているか、その句の中に自由律の句は含まれているか否かについても見てきた。

その調査に基づいて、各教科書がどの俳人の句を何句教材として取り上げているか

は「七 歌謡・和歌・俳句」の単元に「柿くへば」と題して、子規・碧梧桐・鬼城・蛇笏・茅舎・汀女・波郷の7名の俳句、子規の句は5句、あとの6名の句は3句ずつ、計23句を載せる。碧梧桐の3句も定型の句ばかりで自由律の句は見られない。

J 筑摩書房 「高等学校用国語Ⅰ・Ⅱ」

近代俳句は「国語Ⅰ」だけに載せており、「11 俳句」の単元に「俳句遠近」と「秋の雲」の2つの章を設けて扱っている。「俳句遠近」は加藤楸邨の筆になる鑑賞文で近代俳句10句につき鑑賞している。「秋の雲」は、子規・虚子・誓子・草田男・波郷・山頭火の6名の俳句を4句ずつ、計24句を載せている。山頭火の4句はいずれも自由律俳句。

K 角川書店 「高等学校総合国語Ⅰ・Ⅱ」

近代俳句は「国語Ⅰ」に24句、「国語Ⅱ」に21句を載せる。

「国語Ⅰ」では「十一 近代の短歌・俳句」の単元の「遠山に」の章に、虚子・蛇笏・秋桜子・誓子・草田男・楸邨・波郷・兜太の8名の俳句を3句ずつ、計24句を載せ
「国語Ⅱ」では「九 近代の短歌・俳句」の単元の「赤い椿」の章に、碧梧桐・鬼城・茅舎・汀女・三鬼・竜太・澄雄の7名の俳句を3句ずつ、計21句を載せる。碧梧桐の3句のうち2句は自由律。

L 角川書店 「高等学校精選国語Ⅰ・Ⅱ」

近代俳句は「国語Ⅰ」と「国語Ⅱ」に15句ずつ、計30句を載せている。

「国語Ⅰ」では「九 近代の叙情－短歌・俳句－」の単元の「赤い椿－近代俳句－」の章に、碧梧桐・蛇笏・草田男・波郷・多佳子の5名の俳句を3句ずつ、計15句を載せ、「国語Ⅱ」では「九 日本の叙情－近代短歌・近代俳句－」の単元の「遠山に－近代俳句－」の章に、虚子・秋桜子・誓子・楸邨・兜太の5名の俳句を3句ずつ、計15句を載せる。碧梧桐の3句のうちの2句は自由律。

M 旺文社 「高等学校国語Ⅰ・Ⅱ」

近代俳句は「国語Ⅰ」だけで扱う。「12 俳諧と俳句」の単元の「雲に鳥－俳句との出会い－」は川崎展宏の書き下ろしの文章で近代俳句にも触れる。「近代俳句抄」は、子規・漱石・碧梧桐・虚子・秋桜子・誓子・草田男・楸邨・波郷の9名の俳句を2句ずつ、計18句を載せる。碧梧桐の2句は自由律。

N 尚学図書 「高等学校国語Ⅰ・Ⅱ」

近代俳句は「国語Ⅰ」と「国語Ⅱ」の両方に15句ずつ、計30句を載せ、またⅠとⅡの両方に鑑賞文も載せている。

「国語Ⅰ」では、「七 短歌と俳句」の単元に「近代の俳句」と「俳句の鑑賞」の章

近代俳句は「国語Ⅰ」の「十 俳句」の単元に、「近代俳句」と題して、子規・虚子・秋桜子・誓子・草田男・楸邨の6名の俳句を2句ずつ、計12句を載せている。自由律の句は見られない。「国語Ⅱ」には俳句の教材を載せていない。

E 光村図書 「国語Ⅰ・Ⅱ」

近代俳句は「国語Ⅰ」では扱わず、「国語Ⅱ」の「十一 短歌・俳句」の単元の「秋二つ」と「生きている時間」の2つの章で扱う。「秋二つ」の章には、子規・虚子・秋桜子・誓子・草田男・波郷の6名の俳句を2句ずつ、計12句を載せている。この中に自由律の句は見られない。「生きている時間」は加藤楸邨の筆になる俳論。

F 大修館 「高等学校国語Ⅰ・Ⅱ」

近代俳句は「国語Ⅰ」では扱わず、「国語Ⅱ」の「九 俳句」の単元の「近代の俳句」と「俳句の鑑賞」の2つの章で扱う。「近代の俳句」の章では、子規・虚子・鬼城・蛇笏・秋桜子・草田男・誓子・楸邨・波郷・山頭火の10名の俳句を3句ずつ、計30句を載せる。自由律の句は山頭火の3句。「俳句の鑑賞」は中村草田男の筆になる鑑賞文。

G 明治書院 「基本国語Ⅰ・Ⅱ」

「国語Ⅰ」と「国語Ⅱ」の両方に近代俳句を15句ずつ、計30句を載せている。

「国語Ⅰ」では「八 詩歌」の単元に「高嶺星（俳句十五句）」と題して、虚子・秋桜子・草田男・楸邨・汀女の5名の俳句を3句ずつ、計15句を載せ、「国語Ⅱ」では「八 詩歌」の単元に「山河（俳句十五句）」と題して、碧梧桐・鬼城・誓子・波郷・竜太の5名の俳句を3句ずつ、計15句を載せる。碧梧桐の3句も定型の句ばかりで、30句の中に自由律の句は見られない。

H 明治書院 「精選国語Ⅰ・Ⅱ」

「国語Ⅰ」と「国語Ⅱ」の両方に近代俳句を15句ずつ、計30句を載せている。

「国語Ⅰ」では「6 詩歌」の単元に「手毬歌（俳句十五句）」と題して、虚子・秋桜子・草田男・楸邨・久女の5名の俳句を3句ずつ、計15句を載せ、「国語Ⅱ」では「6 詩歌」の単元に「雲の峰（俳句十五句）」と題して、碧梧桐・蛇笏・誓子・波郷・澄雄の5名の俳句を3句ずつ、計15句を載せる。碧梧桐の3句も定型の句ばかりで、30句の中に自由律の句は見られない。

I 右文書院 「高等学校国語Ⅰ・Ⅱ」

近代俳句は「国語Ⅰ」に24句、「国語Ⅱ」に23句、計47句を載せている。

「国語Ⅰ」では「六 短歌・俳句」の単元に「炎天の空」と題して、虚子・久女・秋桜子・誓子・草田男・楸邨の6名の俳句を4句ずつ、計24句を載せる。「国語Ⅱ」で

ただし、このページ数というのはおおまかなものであることをことわっておきたい。教科書によっては1ページに10句とか12句とか載せているものがある一方では挿絵や写真を入れて俳句は1ページに2句載せるだけという場合もあって、ページ数と載せられた俳句の数は比例しない面があるからである。

なお、鑑賞文の中には、近代俳句のほかに、古典俳句や近代短歌をいっしょに鑑賞しているものがあるが、その場合には近代俳句についての部分だけを概算してページ数として示した。

3. どの俳人の句を採っているか

前の第2章では、各教科書が近代俳句を何句ほど教材として載せているか、近代俳句のために何ページほどさいているかを眺めたが、この章ではもう少し具体的にどの句を教材として採っているかを調べてみることにする。

その手はじめとして、最初に17種類のそれぞれの教科書について、近代俳句の単元の構成の特色を眺めた上で、どの俳人の句を何句取っているかを調べてみたい。

A 東京書籍 「国語Ⅰ・Ⅱ」

近代俳句は「国語Ⅰ」には載せず、「国語Ⅱ」の「十 短歌・俳句」の単元で、「白牡丹一俳句抄一」と題して、子規・虚子・蛇笏・秋桜子・誓子・三鬼・茅舎・草田男・楸邨・波郷の10名の俳句を3句ずつ、計30句を載せている。自由律の句は見られない。

B 学校図書 「高等学校国語Ⅰ・Ⅱ」

近代俳句は「国語Ⅰ」では扱わず、「国語Ⅱ」の「六 詩・俳句」の単元の「野面積みの石垣」と「近代の俳句」の2つの章で扱う。「野面積みの石垣」は飯田竜太の『私の俳句入門』という著書から採った俳論である。「近代の俳句」の章では、子規・碧梧桐・虚子・井泉水・蛇笏・秋桜子・誓子・草田男・楸邨の9名の俳句を2句ずつ、計18句を載せている。自由律の句は碧梧桐・井泉水の句が1句ずつ、計2句とられている。

C 三省堂 「新国語Ⅰ・Ⅱ」

近代俳句は「国語Ⅰ」では扱わず、「国語Ⅱ」の第3の単元の「わたつみの」の章で「近代の俳句十句」と題して、子規・碧梧桐・虚子・放哉・蛇笏・秋桜子・多佳子・三鬼・草田男・誓子の10名の俳句を1句ずつ、計10句を載せている。自由律の句は碧梧桐・放哉の句が1句ずつ、計2句とられている。

D 教育出版 「国語Ⅰ・Ⅱ」

いるのが注目される。

今まで見てきたように、17種類の教科書の中には、「国語Ⅰ」か「国語Ⅱ」のどちらか1つにおいて近代俳句を扱うものと、その両方で扱うものがある。また、俳句作品だけを載せている教科書と、俳句の鑑賞文や俳論を載せているものがある。このように教科書の近代俳句の扱いはいろいろで、各教科書が近代俳句のためにさいているページ数も、18ページから3ページとひらきが見られる。

そこで、各教科書が近代俳句にどの程度のウエイトを置いているかを測る手がかりとして、近代俳句にさいているページ数を調べ、多いものから少ないものへと順に並べたものが下の〔表3〕である。

〔表3〕 近代俳句のために用いているページ数

	発行所	書名	国語Ⅰ	国語Ⅱ	合計
O	尚学図書	高等学校新選国語Ⅰ・Ⅱ	12	6	18
F	大修館	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ		16	16
P	第一学習社	高等学校新国語Ⅰ・Ⅱ		16	16
J	筑摩書房	高等学校用国語Ⅰ・Ⅱ	16		16
N	尚学図書	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	8	8	16
B	学校図書	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ		15	15
E	光村図書	国語Ⅰ・Ⅱ		10	10
I	右文書院	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	5	5	10
K	角川書店	高等学校総合国語Ⅰ・Ⅱ	6	4	10
L	角川書店	高等学校精選国語Ⅰ・Ⅱ	6	4	10
M	旺文社	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	10		10
G	明治書院	基本国語Ⅰ・Ⅱ	4	4	8
H	明治書院	精選国語Ⅰ・Ⅱ	4	4	8
A	東京書籍	国語Ⅰ・Ⅱ		5	5
Q	第一学習社	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ		5	5
D	教育出版	国語Ⅰ・Ⅱ	4		4
C	三省堂	新国語Ⅰ・Ⅱ		3	3

() は、近代俳句を教材とする単元は設けられているが、そこに鑑賞文や俳論の類が載せられていないことを示す。

〔表2〕を見てわかるように、17種類の教科書は、いずれも少なくとも「国語Ⅰ」か「国語Ⅱ」のどちらかにおいて近代俳句を教材として載せており、約半数にあたる8種類の教科書では、「国語Ⅰ」と「国語Ⅱ」の両方に近代俳句の教材を載せている。「国語Ⅰ」と「国語Ⅱ」の両方に近代俳句の教材を置いている教科書の中には、ⅠとⅡの両方を合計すると、右文書院の「高等学校国語Ⅰ・Ⅱ」の47句、角川書店の「高等学校総合国語Ⅰ・Ⅱ」の45句、尚学図書「高等学校新選国語Ⅰ・Ⅱ」の36句というように、比較的多くの俳句を載せている教科書が見られる。

その反対に、載せている近代俳句の数が少ないものとしては、三省堂の「新国語Ⅰ・Ⅱ」の10句、教育出版の「国語Ⅰ・Ⅱ」の12句、光村図書の「国語Ⅰ・Ⅱ」の12句などがある。

こんど調査を行った17種類の教科書の中には、「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」を合わせると、延べにして439句の近代俳句が収められているから、1種類の教科書の平均句数は25.8句ということになる。ただし、この場合の俳句の数の中には、鑑賞文中に引用された俳句は入れてない。

「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」の教科書の中には、近代俳句の単元の中に、俳句作品そのもののほかに、鑑賞文や俳論を載せているものがある。それは8種類の教科書に見られ、次の10編である。

B	学校図書	高等学校国語Ⅱ	飯田 竜太	「野面積みの石垣」
E	光村図書	国語Ⅱ	加藤 楸邨	「生きている時間」
F	大修館	高等学校国語Ⅱ	中村草田男	「俳句の鑑賞」
J	筑摩書房	高等学校用国語Ⅰ	加藤 楸邨	「俳句遠近」
M	旺文社	高等学校国語Ⅰ	川崎 展宏	「雲に鳥—俳句との出会い—」
N	尚学図書	高等学校国語Ⅰ	秋元不死男	「俳句の鑑賞」
N	尚学図書	高等学校国語Ⅱ	大岡 信	「折々のうた」
O	尚学図書	高等学校新選国語Ⅰ	中村草田男	「俳句の鑑賞」
O	尚学図書	高等学校新選国語Ⅱ	大岡 信	「折々のうた」
P	第一学習社	高等学校新国語Ⅱ	飯田 竜太	「俳句は野面積みの石垣に似ている」


この表を見ると、尚学図書の「高等学校国語Ⅰ・Ⅱ」および「高等学校新選国語Ⅰ・Ⅱ」が、ⅠとⅡの両方に鑑賞文を載せて、生徒の近代俳句の理解を助けようとして

2. 各教科書における近代俳句教材

まず最初に、17種の教科書がそれぞれ近代俳句教材にどの程度のウェイトを置いているかをおおまかに知るための手がかりとして、載せている近代俳句作品の数と、近代俳句の鑑賞文や俳論を載せているかを調べてみると、下の〔表2〕のようである。

〔表2〕 近代俳句の数と鑑賞文等の有無

	発行所	書名	俳句			鑑賞文等	
			国語 I	国語 II	合計	国語 I	国語 II
A	東京書籍	国語 I・II	/	30	30	/	————
B	学校図書	高等学校国語 I・II	/	18	18	/	野面積みの石垣 飯田 竜太
C	三省堂	新国語 I・II	/	10	10	/	/
D	教育出版	国語 I・II	12	/	12	/	————
E	光村図書	国語 I・II	/	12	12	/	生きている時間 加藤 楸邨
F	大修館	高等学校国語 I・II	/	30	30	/	俳句の鑑賞 中村草田男
G	明治書院	基本国語 I・II	15	15	30	————	————
H	明治書院	精選国語 I・II	15	15	30	————	————
I	右文書院	高等学校国語 I・II	24	23	47	————	————
J	筑摩書房	高等学校用国語 I・II	24	/	24	俳句遠近 加藤 楸邨	/
K	角川書店	高等学校総合国語 I・II	24	21	45	————	————
L	角川書店	高等学校精選国語 I・II	15	15	30	————	————
M	旺文社	高等学校国語 I・II	18	/	18	雲に鳥—俳句との出会い— 川崎 展宏	/
N	尚学図書	高等学校国語 I・II	15	15	30	俳句の鑑賞 秋元不死男	折々のうた 大岡 信
O	尚学図書	高等学校新選国語 I・II	21	15	36	俳句の鑑賞 中村草田男	折々のうた 大岡 信
P	第一学習社	高等学校新国語 I・II	/	16	16	/	俳句は野面積みの石垣に似ている 飯田 竜太
Q	第一学習社	高等学校国語 I・II	/	21	21	/	————

上の〔表2〕の「短歌」および「鑑賞文」の欄の斜線（）は、その教科書には近代俳句が教材として載せられていないことを示す。また「鑑賞文」の欄の横線

〔表1〕 「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」教科書一覧表

符号	発行所	書名	教科書の略称	著者
A	東京書籍株式会社	国語Ⅰ・Ⅱ	東書	高田瑞穂・阪倉篤義ほか15名
B	学校図書株式会社	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	学図	吉田精一・阿川弘之・野地潤家ほか12名
C	株式会社 三省堂	新国語Ⅰ・Ⅱ	三省	広末保・金谷治ほか17名
D	教育出版株式会社	国語Ⅰ・Ⅱ	教出	五味智英・中村真一郎ほか15名
E	光村図書株式会社	国語Ⅰ・Ⅱ	光村	石森延男・井上靖ほか13名
F	株式会社 大修館書店	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	大修	馬淵和夫・佐伯彰一・鎌田正ほか20名
G	株式会社 明治書院	基本国語Ⅰ・Ⅱ	明基	市古貞次・長谷川泉・築島裕ほか32名
H	株式会社 明治書院	精選国語Ⅰ・Ⅱ	明精	市古貞次・長谷川泉・築島裕ほか32名
I	株式会社 右文書院	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	右文	阪本浩・竹岡正夫・松村博司ほか20名
J	株式会社 筑摩書房	高等学校用国語Ⅰ・Ⅱ	筑摩	秋山虔・猪野謙二・分銅悖作ほか4名
K	株式会社 角川書店	高等学校総合国語Ⅰ・Ⅱ	角総	吉田精一ほか18名
L	株式会社 角川書店	高等学校精選国語Ⅰ・Ⅱ	角精	吉田精一ほか18名
M	株式会社 旺文社	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	旺文	松村明・新聞進一・岡保生ほか16名
N	株式会社 尚学図書	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	尚学	山本健吉ほか5名
O	株式会社 尚学図書	高等学校新選国語Ⅰ・Ⅱ	尚新	山本健吉・前野直彬・三好行雄ほか3名
P	株式会社 第一学習社	高等学校新国語Ⅰ・Ⅱ	一新	稲賀敬二・市川孝・竹盛天雄ほか14名
Q	株式会社 第一学習社	高等学校国語Ⅰ・Ⅱ	第一	稲賀敬二・市川孝・竹盛天雄ほか14名

を密接に保ちながら、その内容をさらに発展させたもので、これまで行われてきた、「現代国語」と古典に関する科目との基本的な内容を整理して構成された総合科目と規定しており、第1学年において履習させることを原則としている。

「国語Ⅱ」は選択科目ということになってはいるが、「国語Ⅰ」に引き続いて履習することが望ましい、いわば「準必修科目」として位置づけられており、「国語Ⅰ」との密接な連関のもとに、総合的な国語力をさらに高めることを目標としている。

このような新学習指導要領に基づいて作られた高等学校用教科書は、「国語Ⅰ」は昭和56年の検定に合格したものが昭和57年度から現場で使用されるようになり、「国語Ⅱ」は昭和57年の検定に合格したものが昭和58年度から使用されるようになった。それぞれ3年後に改訂が加えられ、「国語Ⅰ」は昭和59年の検定に合格したものが60年度から現場で使用されるようになり、「国語Ⅱ」は昭和60年の検定に合格したものが61年度から使用されている。

以上のように高等学校用教科書「国語Ⅰ」および「国語Ⅱ」は、新指導要領に基づいて初めて姿を現わしたところの昭和56・57年度から現場で使われるようになったものと、昭和60・61年度から使われるようになった改訂版とが存在する。そして今日、高等学校の現場では改訂版が用いられている場合が多い。

今回の調査では、もっぱら昭和56・57年の検定に合格し、その翌年度から使われるようになった、元の版の教科書を対象として、改訂版については別の機会にゆずることとした。元の版と改訂版との両方を一度に対象とすると、教科書の種類がふえて煩雑になるのを怖れたこと、先に行った現代短歌についての調査の場合と対象を一致させようとしたことなどの理由による。

調査・考察の対象として取り扱うことにした「国語Ⅰ」および「国語Ⅱ」の教科書は、次のページの〔表1〕のように13の出版社から発行された17種類である。この表の17種類の教科書の配列の順序は、文部省発行の「高等学校教科書目録」における配列に従った。

なお、〔表1〕には発行所・書名・著作者のほかに、「教科書の略称」を記した。これは、あとの〔表5〕「作品別掲載俳句一覧表」において、それぞれの俳句作品がどの教科書に載せられているかを一覧表の形で示すときの便宜のためである。文部省発行の「高等学校教科書目録」にも略称が記されているが、それは「発行所の略称」であって、この〔表1〕の「教科書の略称」と同じではない。1社から2種類の教科書を発行している場合などに、教科書を区別するために〔表1〕では別の略称を用いた場合があるし、略称はすべて漢字2字に統一した。

高等学校教科書「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」 における近代俳句教材

貞 光 威

1. はじめに

この調査は高等学校の「国語Ⅰ」および「国語Ⅱ」の教科書において、近代俳句に関する教材がどのように扱われているかを、各出版社から発行されたすべての教科書17種について調査し、その特色と問題点を考察したものである。同じく短詩型文学である近代短歌の各教科書の取り扱いについては、「高等学校用教科書『国語Ⅰ』・『国語Ⅱ』における近代短歌教材」と題して、『聖徳学園岐阜教育大学紀要』第13集（昭和61年9月発行）に発表しているので、それも参照していただきたい。

高等学校の「国語Ⅰ」・「国語Ⅱ」という科目は、新しい「高等学校学習指導要領」に基づいて新設された科目なので、まずその辺の事情について述べておくと、文部省では昭和53年8月30日に「高等学校指導要領」の改訂と学校教育法施行規則の一部改訂を行ったが、この教育課程についての新しい基準は昭和57年から学年進行によって適用された。

昭和53年に行われた「高等学校学習指導要領」の改訂は、昭和51年12月18日に教育課程審議会が行った「小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改訂について」と題する答申に基づいて実施されたもので、国語科の場合について見ると、言語の教育であるという立場を明確に打ち出し、言語表現の能力を高めることを重視して、これまでのものに比べて目標と内容を精選することをねらっているのが特色となっている。

科目の編成も、その観点から大幅な改訂が加えられ、「国語Ⅰ」とそれにつづく「国語Ⅱ」を設けて国語の基礎的な能力を高めることを目指し、その発展として、「国語表現」・「現代文」・「古典」の3つの科目を設けて、生徒の適性・進路などに応じて選択履習させることが考えられている。

このうちの「国語Ⅰ」は高等学校の国語教育のかなめになる科目として位置づけられており、すべての生徒に履習させる必修科目とされている。中学校の国語との連関